
ブラコンの姉貴と俺の憂鬱

加藤 大樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラコンの姉貴と俺の憂鬱

【Nコード】

N7773F

【作者名】

加藤 大樹

【あらすじ】

鹿嶋相馬かしまそうまと鹿嶋の血の繋がってない姉の鹿嶋芽衣かじまめいの恋愛話ですもしよかったら読んでください。

第一話 俺の憂鬱

俺の名前は鹿嶋相馬^{かしまそうま}は憂鬱です……………。

まず俺の事を教えよう高校一年生で身長は178体重は60で顔は普通成績は中の中だ唯一の特技はバスケットで一応レギュラーだ俺がレギュラーになれた理由は簡単だバスケット部の人数が八人しかいないくてほとんどが初心者だからだ、家族は両親に姉が一人そうその姉が俺の憂鬱の理由だ。

姉は容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の生徒会長で男性にも女性にもおもてになっしやる高校二年生、戸籍上は姉だが血は繋がっていないそれでブラコンだここまではアニメみたいだが現実はそんなに甘くない血が繋がってない事は俺の家族しか知らなくて他の人たちは皆俺と姉を比べるそれが憂鬱の理由だ。

ほとんどの人が姉関係で俺に話しかけてくるしかもあげくのはてに両親までも俺に「姉さんを見習いなさい」や「血が繋がってないとはいえ何で同じ環境なのにもう少し頑張れないのか」とかぬかしやがる最悪だ。

しかも姉とは同じ高校だからよけい比べられる事がおおい、なぜ俺が姉と同じ高校に行ったかって？その理由はその高校からスポーツ推薦が来たからだ、当然俺は姉と比べられるのが嫌で拒否したさでも両親が頼んできたんだよ、それで無理やり同じ高校に通うことになったんだよ……………はあマジで最悪だ、それで高校に通いはじめて約一ヶ月が経った時にはすでに学校のほとんどの人が俺と姉が兄弟だってばれてマジ最悪だ。

そしてまた今日も俺の憂鬱な日々が始まるんだよ……………。

「起きろ～～～遅刻するぞ～～～起きなきゃキスするぞ～～」

俺を揺さぶりながらそういうのは俺の姉、鹿嶋芽衣だ。かじまめい

「分かったから起きますはいはいだからキスするな」

俺は必死に抵抗して姉の手をどかす。

「もう、抵抗しちゃって可愛い」

俺はその言葉を見殺してリビングに向かってご飯を食べてた。

そうしている間に時間は過ぎて登校時間になったから俺は姉にきずかれると「一緒にといこうしよ～～」とかいつて着いてきそうだから姉にきずかれないように家を出た。

「ソウ～～～おはよう」

そう言っ俺の肩を叩いてくるのは俺の親友の堂本鎖月俺と姉をどうもていづつき比べずに普通の友達でいてくれる最高の親友だこいつもバスケット部でレギュラーだ。

「鎖月おはよう」

「今日はお前の姉さんいないんだな～～～ま、いいけど」

「ああ、やっぱり俺お前が親友でよかったよ、お前だけだよ俺と姉さんを比べないでくれるのは」

うう、感動のあまり涙がでそうだ……。

「ははは、親友だから当然じゃないか」

「ありがとう」

そう言って俺たちは学校に向かう、学校に行く途中いろんな人が「今日は芽衣さんと一緒にじゃないんだ」と姉の事しか聞いてこない、マジで最悪だよ……。

俺がどんどん不機嫌になってきたのが分かったのか鎖月が。

「きにするな、お前はお前じゃんか」

「うんそうだよな、本当にありがとう」

俺達はそう言って友情のレベルが1上がった、なんちゃって。

俺達は学校に着くとやっぱり俺に話しかけるほとんどの人が姉の話題で俺の怒りのバラメーターがどんどんあがって行くのが自分でも分かった、そんな時にいつも鎖月が助け舟を出してくれるから助かっている。

時間が経って昼休みになった。

「ソウゝ一緒に飯食おうぜ」

「ああ、いいよ、って事で早く行こう」

俺は鎖月の手を引いて逃げるように屋上に向かう、なぜ逃げるようになって？その理由は簡単だ姉が来るからだよ、そうすると他の生徒達もどんどん来るからめんどくさいからだ。

「はあゝやっぱり屋上の風は気持ちいいねゝゝ」

俺はそう言って家からもってきたパンと牛乳を出して食べ始める。

「ああ、そうだなゝゝ確かにいい風だ」

俺たちがそう言ってご飯を食べていると屋上のドアが思いっきり開く、俺たちはその屋上のドアからは俺たちは見えないつまり俺達もその人を確認できないためこっそりとそのドアの前に立ってる人物を見た・・・・・・・・その人物とは何か分かってたけどやっぱり姉だった・・・・・・・・。

「いいか絶対見つかるなよ」

俺は鎖月にそう言うのと鎖月は黙って頭を縦に振る。

「つち、おかしいなゝゝここにソウちゃんがいるって聞いたのに」

今舌打ちしましたよ、それにだれっだよ教えた奴もし見つけたらそいつぶっ飛ばしてやる。

数分して姉はさって行った。

「ふうゝゝこれで安心だ」

「ああ、そうだな相変わらずお前の姉ってお前のために何でもしそ
うだよな・・・・・・・・ほんと」

「はあゝ姉の話題は止めてくれ」

「ああ、そうだったな、悪い悪い、そうだった俺先生に呼ばれてたから先に教室に行ってるからな」

鎖月が行ったあと俺はずーと空を見上げて飯を食べていると、そろそろ授業が始まるから俺は屋上を出て教室に向かった。

教室に向かう途中今一番合いたくない人に会ってしまった・・・
・俺の姉に・・・。

「あ~~~~ソウちゃんだ、やっと会えた♪」

そういいながら思いっきり走りながら俺に抱きつこうと近づいて来る、俺はそれをうまく避けた、周りから「普通避けるかよ」とか色々なことを言っていたけど気にしないで。

「なんで抱きつこうとするんだよ」

「いいじゃん~~~~」

「よくねえよ、じゃあな」

「ちょ・・・って~~~~」

俺はそう言って逃げるように走っていく後ろで姉が何か言っていた気がしたけど俺は無視して走って行った。

「ふう~~~~ったく疲れた〜」

俺はそう言って教室に戻った。

その後無事授業が終わり今日は部活が無いから俺はそのまま鎖月と一緒に家に帰った。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

その後母親と適当な話をして自分の部屋に入った。
宿題を終わらせると時間はもう午後七時になっていた。

「ソウちゃん、お母さんがご飯のしたく出来たって」

姉がそう言って俺の部屋に入って来た。

「宿題やってたんだえらいね」

そう言って俺の頭を撫でる。

「あ、はいはいご飯できたんだろ行くぞ」

リビングに向かうと和風の料理とご機嫌な母親と父親がいた。
俺はご機嫌な母親と父親を無視して。

「いただきます」

俺はそう言ってもくもくと食べ始めた。

「ねえあなた、芽衣また小テストで満点だったのよ」

母親が父親にそう話しかけると父親は機嫌がよくなって笑顔で。

「そうなのか、えらいな芽衣、相馬も芽衣を見習ってバスケばかり

しないで勉強もしなさい」

父親は姉さんの頭を撫でながら俺には少しきつい目をして言う。いつもこうだ俺と姉さんを比べては姉さんには優しくして俺には厳しくするそれが一週間に一回はいつも起こる、俺と姉をいつも比べる両親が実を言うあまり好きではない、だから今もイライラしている。

俺は父親の言った言葉を見殺してもくもくと食べる。

「相馬、無視しないでちゃんと答えなさい」

無視した事が気にさわったのか俺に鋭い口調で言ってくる。

「はいはい分かりました、すみませんね姉さんみたいにいなくてどうせ俺はバスケしか脳がありませんよ」

「その口調は何だ、私はお前の父親だぞお前が食えてるのは誰のおかげだと思ってる」

「うち、すみませんでした、俺が食えてるのは貴方のおかげです」
(棒読み)

俺はそう言ってご飯を食べ終わったから「ごちそうさま」そう呟いてすぐ自分の部屋に戻った。

俺がそのまま部屋に戻って布団にもぐっていると、姉さんが来て

「私のせいでごめんね」

何で姉さんが誤るんだよ姉さんは悪くないじゃんか。

「いいよ・・・姉さんは悪くないんだよ当たり前的事したただじ
ゃんかバスケしかとりえの無い俺がいけないんだから」

そういうと姉はそつと俺の頭を撫でて小さな声で「ごめんね・・・
」と呟いた。

俺は少し泣きそうになったため俺は部屋から姉を追いついて少し
だけ泣いた・・・これは俺だけの秘密だ。

そしてそのまま気がついたら寝てしまった。

第一話 俺の憂鬱（後書き）

書くのが下手ですがもしよかったら評価や感想お願いします。

第二話 私の気持ち

(この話は一話の一部と続きを芽衣視点で書いたものです)

私の名前は鹿嶋^{かじま}芽衣、私は大好きなソウちゃんを今日も苦しめてしまった・・・。

「ねえあなた、芽衣また小テストで満点だったのよ」
ふと私の母親が私の父親にそう言ってきた。

「そうなのか、えらいな芽衣、相馬も芽衣を見習ってバスケばかりしてないで勉強もしなさい」

そう言って私の父親は私の頭を撫でる・・・父親に撫でられるのなんて全然嬉しくなかった・・・私の事はほめるのにソウちゃんにはひどい事をいった父親を私はうらんだ・・・でもこのそんな事言ったら私はソウちゃんのそばにいられなくなっちゃうそれが一番嫌だっただから言わない・・・そんな自分も嫌だった・・・。

「相馬、無視しないでちゃんと答えなさい」

ソウちゃんが無視したのが気にさわったのかソウちゃんにきつい口調で言う。

「はいはい分かりました、すみませんね姉さんみたいになくなってどうせ俺はバスケしか脳がありませんよ」

ソウちゃんは喧嘩口調に父親に言う。

「その口調は何だ、私はお前の父親だぞお前が食えてるのは誰のおかげだと思ってる」

父親はソウちゃんにそういう・・・自分だって分かってるくせにソウちゃんは私と比べられるのが好きじゃないって知ってるくせに・・・。

「ucci、すいませんでした、俺が食えてるのは貴方のおかげです」
(棒読み)

明らかに棒読みで言った言葉に父親が怒ったみたいだがソウちゃんは無視して小さな声で「ごちそうさま」そう言ってソウちゃんは自分の部屋に戻って行った。

私がソウちゃんの後を追ってソウちゃんの部屋に入るとソウちゃんは布団にもぐっていた。

その時私はまたソウちゃんを苦しめてしまったんだ・・・そう思った。

私はソウちゃんの近くに行ってソウちゃんの頭を撫でた。

「私のせいでごめんね」

私は謝る事しか出来なかった、私のせいでソウちゃんが苦しめるのにソウちゃんは、私に。

「いいよ・・・姉さんは悪くないんだよ当たり前の事しただけじゃんかバスケしかとりえの無い俺がいけないんだから」

ソウちゃんは優しい私のせいなのにいつも私にそう言ってくれる、

それにソウちゃんのバスケはすごくうまいと思う、なんでお父さんたちはその事をきずかないんだろう・・・疑問に思った。

私はソウちゃんのためにわざと普通の点数をとった時があったでもその事はすぐソウちゃんにばれて怒られた、それにその時のソウちゃんの顔は悲しい顔をしていたその顔は一生忘れられないと思う、その時私はわざと悪い点数をとるのは止めようとソウちゃんに誓った。

そして私はソウちゃんの頭を撫でて「ごめんね・・・」と呟いた、その後ソウちゃんは私を部屋から追い出した。

夜遅く私はソウちゃんの部屋に訪れた、これは日課みたいなものだ。

部屋を開けるとソウちゃんは布団でぐっすり眠っていた、ソウちゃんの綺麗な顔美しい髪それを見るとすごく襲いたくなってしまう。

私の友達の生徒会の副会長の佐藤奈美さとうなみによく「あんたのブラコンもたいがいにしなさいよ～」ってよく言われる、でも私はブラコンの上をいつてる私はソウちゃんのすべてが好きだ、本気で結婚したいと思ってるソウちゃん以外の男になんて興味はない、でもソウちゃんは私の事を姉とは思ってないかもしれないでも幸いな事に私たちは兄弟だけど血は繋がってない事その事を知った時私は天にも昇るほど幸せだった。

私はベットで寝ているソウちゃんを見たソウちゃんの顔に少し泣いたあとがあった、ものすごく悲しくなった・・・。

私はゆっくりソウちゃんに近づいてソウちゃんの唇にキスをした

その時の気持ちはとても晴れ晴れしていた、何も言わず人の唇にキスすることに皆は私の事をズルイとか言うと思う、でも私はソウちゃんにキスしないと自分の気持ちを我慢できないで抑えられなくなっちゃうからキスをする。

私が始めてソウちゃんにキスをしたのは中学一年生の時からだった。

その時の事は忘れたことがない中一の時私は夜遅く目が覚めて退屈だからソウちゃんの部屋にいった、寝ていたソウちゃんを見て私はソウちゃんの事が襲いたくてたまらない症状に陥ったそれで私は我慢するためにソウちゃんにキスをした、その時私のファーストキスの相手がソウちゃんだったこととキスできたことがそれに多分ソウちゃんのファーストキスの相手が私だった事がとても嬉しくてたまらなかった。

私は名残惜しかったけどソウちゃんの部屋を出て幸せで眠りについた。

朝、私はいつものようにソウちゃんを起こしに行く。

ソウちゃんは気持ちよさそうにぐっすり寝ていた、またキスしそうな衝動に襲われそうになったけど我慢してソウちゃんを起こす。

「ソウちゃん〜おきて〜起きないとキスするぞ〜」

「あ〜はいはい起きますよだから俺のファーストキスを奪わないでください」

「うん、じゃあ起きよう〜」

実はもう私がソウちゃんのファーストキスもうもらっちゃったん

だけどね♪

「はいはい、先に行って飯食ってるからな〜」

そう言っソウちゃんは私を置いて部屋を出て行ッた。

その後ソウちゃんの部屋に一人でいる私は、ソウちゃんの布団にもぐっていたその時間大体二〜三分だけど十分気持ちよかった、ソウちゃんのいい匂いやソウちゃんがいつも寝ているベットと思うとすごく満足した。

私はソウちゃんの後を追ッてソウちゃんが待っているリビングに向かった。

そしてソウちゃんと一緒にご飯を食べて一緒に学校に向かった、昨日は一緒に通えなかったからすごく嬉しかった。

第三話 家出

(この話は鎖月視点で書いたものです)

ピンポン、ピンポンピンポン

俺、堂本鎖月は今騒音に悩んでいます、まあだいたい誰だかわかるんだけどな。

「はいはい、なんだよソウ」

そうさつきからインターホンを何回も鳴らしてるのはお泊りセツトをもった鹿嶋相馬だった。

「何だまた泊まりに来たのか？」

こいつは一ヶ月に一度は俺の家に泊まりに来る。

「ああ、そうだよ悪いかいいだろうお前一人暮らしなんだし」

あゝこいつかなり機嫌悪いな・・・。

「まあ、泊めてやるけどさまた親と喧嘩したのか？」

「ああそうだよ、あの親バスケットを馬鹿にしゃがったんだ」

「はあゝそれくらいで喧嘩するなよ」

まあこいつがバスケットにかける情熱はすごいものだからバスケットを馬

鹿にされた事はものすごく腹が立っただろうな。

「いいんだよ、という事で泊めてもらうからな」

そう言っソウは俺の家に遠慮なくどんだん入って行く。

「おい、ソウお前の姉に何処に泊るのかちゃんと連絡したのか？」

こいつの姉は前ソウが家出した時かなりすごかった知り合い全ての家によってあるところでは人を脅迫的な事したらしい、それ以来ソウにちゃんと連絡しろって言っている。

「ああ言った、あとで来るって言ってた」

「え？あの人来るのか？」

「うん、来るって言ってた」

「はあゝまあいいや」

ソウが始めて家出した時はやばかった芽衣さんに俺は半殺しにされて俺は誘拐犯的な感じに間違えられたから・・・あの時ソウが止めなかったら俺どうなってたんだろ・・・。

一応ソウがどういういきさつで喧嘩したのか聞いてみたらこんな感じらしい。

~~~~~相馬の家での出来事~~~~~

「相馬なんだこの小テストの点数は」

今日返された小テストを相馬の父親が見て相馬にきつい口調で言う。

「百点中四十二点ですが何か？」

「なにが四十二点だバスケだけじゃなくてちゃんと勉強しなさい」

「いいじゃないですか俺スポーツ推薦なんだし」

「なんなんだその態度はバスケなんかくだらないもの夢中になりおつて」

その言葉にソウはカチンときたらしく。

「は？ふざけんなよ、こっちはあんたらが頼んできたからスポーツ推薦で高校通ってやってるんだぞ、俺は違う高校行きたかったのに」

「受験するのには金がかかるんだぞ家庭を考えろ」

「は？そんなの知るかよ姉さんばっか特別扱いしやがって、毎日毎日俺と姉さんを比べて楽しいか？だいたい自分はどうなんだよ毎日テストで百点か百点近い点数とってたのか？」

ソウがそういうとそろそろやばいと思った芽衣さんが。

「ソウちゃんちょっと落ち着いてね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、ごめん姉さん、俺今日鎖月の家に泊まるから」

「そっか、うん分かった私も多分後で行くから」

「分かった」

そう言って家出して今にいたるらしい・・・・・・・・・・。

「なるほどね・・・・・・・・そうだったのかならお前がテストでいい点数とればいいじゃないか」

「それは無理・・・・・・・・だって勉強あまり好きじゃないから、あゝゝあゝゝその話題終わりたいな」

「ああ、分かった」

二人で適当なこと話してると。

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ドンドンドン「鎖月私の愛しのソウちゃん着てるでしょあけなさい」

「あはは、姉さんが着たみたいだね・・・・・・・・」

「俺開けて来るなソウはそのまま座っててくれ」

俺はそう言ってドアを開けると、芽衣さんが胸倉を掴んできて。

「鎖月私の相馬着てるでしょ上がるからね」

そう言って芽衣さんは家にはいつてきた。  
その後を追ってみると、芽衣さんがソウを思いっきり抱きしめて  
いて。

「ソウ〜〜ごめんね、あと鎖月今日は私も泊まるから」

「え〜〜〜〜」

ソウが信じられないような大声をあげて。

「え、今日姉さん鎖月の家泊まるの？」

「うん♪」

あははは俺の意思関係なしですか一応ここ俺の家なんだけどな・  
・・。

「そっか・・・まあいいやそろそろ眠いから俺寝るね鎖月ベツ  
ト借りるから・・・よろしく」

言い忘れてたけど今の時間夜の十二時いい子は寝る時間だよ。

「ああ、分かった」

そう言ってソウは行ってしまい今は俺と芽衣さんの二人かなり気  
まずい・・・。

シーンとした中一番最初に話したのは芽衣さんだった。

「ねえ鎖月、ソウちゃん最近困って無い？」

芽衣さんはいつもソウの事しか考えてないある程度親しくなった  
らそんな事すぐに分かるだろう。

「いいえ、困ってないと思います、バスケットでどんどん上達して  
るし」

「そっか、ならいいんだよ……一ついい忘れてたけどソウ  
ちゃんがいくらカッコイイからって好きになっちゃだめだから」

俺達男同士だからそんな事あるわけ無いだろう、なら俺も一つ疑  
問に思った事聞いてみるか。

「俺たちは男同士だからありえませんが、俺も芽衣さんに一つ聞  
きたい事があります、芽衣さんってソウの事弟とじゃなくて一人の  
男として好きなんじゃないんですか？」

「え……………」

そのときの芽衣さんの顔はかなり驚いていた。

## 第四話 ひどいわ〜

(この話は第三話と続きを芽衣視点で書いたものです)

「え・・・・・・・・・・」

この時私は鎖月の言った事を信じられなかった。

なぜ鎖月が私の気持ち知ってるの？なんで私だけしか知らないのに・・・・・・・・・・何で・・・・・・・・・・。

「あははは・・・・・・・・・・冗談ですよ・・・・・・・・兄弟なんだからありえませんかよね・・・・・・・・」

私はやけにこの言葉に傷ついた「兄弟なんだから・・・・・・・・」って・・・・・・・・。

22

下手にこの会話を鎖月がソウちゃんに話したら・・・・嫌われるか話すらしてくれないかもしれない・・・・・・・・ここは正直に言っこの恋を応援してもらった方がいいのかもしれない。

「いいわ、本当のこと教えてあげるわよ・・・・・・・・私はソウちゃんの方が一人の男性として好きよ」

「へ・・・・・・・・・・」

鎖月は信じられないような顔をして。

「嘘ですよね・・・・・・・・だって貴方達兄弟ですよその事分かってます

か？」

「いいわ貴方に本当の事教えてあげる、私とソウちゃんは血は繋がってないの」

「え．．．う、嘘ですよね」

「本当よ」

「そ、その事はソウ知ってるんですか？」

「うん」

「それでその事を教えたって事は俺にその「恋を応援しろ」ってとか言うんですよね」

おおさすがソウちゃんの友達だよく分かってる。

「おお、よく分かってるわねそのとうりよ、私の恋を応援しなさい、それでソウちゃんには絶対言わないでよね」

「も、もし言ったら．．．．．？」

「本気で殺す．．．．．」

その時の鎖月はかなり汗を出していた。

「はい絶対にいいません」

（絶対に言うかよ．．．死にたくねえから．．．．．）



「そう、それでいいの、私はソウちゃんと寝るからお休み〜」

ソウちゃんと同じ布団で寝よ〜〜久しぶりだな〜〜。

明るい芽衣でした……………。

「あ、鎖月一つ聞きたかったんだけど、鎖月とソウちゃんってどうして友達になったの？」

これは私がずっと疑問に思っていた事だ、ソウちゃんは「いつの間にかなった」とか適当な事しか言わないし。

「あーそんなの簡単ですよ、俺はね中学の頃はバスケットで人に絶対負けない自身があったんですよ……まあ周りの連中のレベルが低かったんですよ……俺口も悪かったし周りから孤立してたんですよ、そんな時にソウと屋上で会って、ソウも友達はいたんですよけど皆ほとんどの話題が芽衣さんで俺と同じように本当の友達と呼べる人はいなかったんですよ、それで俺たちは話が合って友達になってたんですよ」

「へえ〜初めて知ったわ、確かソウがバスケットをやり始めたのは貴方と友達になった頃からじゃなかったっけ？」

「そうですよ、俺が一応ソウにバスケットおしえたんですよ……すぐにあいつに抜かされちゃいましたけど……アハハハ」

「やっぱりソウちゃんはすごかったのね……まあいいわ私ねるかお休み〜」

その後私は今重大な事に悩んでいます・・・。

今ソウちゃんが布団で無防備な姿でぐっすり寝ています・・・いつもの私ならすぐキスするんだけど・・・ここは鎖月の家・・・もし鎖月が入ってきたら大変な事になる・・・どうしょ・・・。

1、ばれてもいいからキスをする。

2、鎖月に部屋に入ってきたら殺すと脅してからキスをする。

3、今日一日は頑張って我慢する。

さあその三択どうしょ・・・3は多分むりだ・・・。

やっぱり2かなうん2だ、2しかない、いやでも・・・逆にそういうと怪しまれるかもしれない・・・。

芽衣が悩み初めてからだいたい三時間経っていますよってただいまの時間深夜の四時です・・・当然のことながら鎖月はすでに寝てるけど、芽衣は気づいていません。

「う~~~~んどうしよう」

太陽が出てきました~~~~もちろん芽衣はきずいていません・・・。

現在七時・・・そろそろ相馬が起きる時間。

「うん・・・姉さんおはよう」

とうとう相馬が起きました〜。

その夜芽衣は一人で泣きましたとさ・・・チャンチャン。

「ひどいわ〜〜〜」

#### 第四話 ひどいわ〜 (後書き)

最後の方はちょっとふざけて書いていました・・・すみません、本当にすみません。

## 第五話 デート??

私、鹿嶋芽衣は今ものすごくショックです・・・なぜかって？その理由は簡単、愛しの愛しのソウちゃんにキスできなかったからです。。。ガーン。

「姉さんおはよう、どうしたの具合悪いの？」

だ、だめよソウちゃんそんな純粋な目で私を見ないで。。。

「だ、大丈夫よ」

「そっか、俺鎖月の所行ってるから」

（今は第四話の続きなので鎖月の家にいます）」

ソウちゃんが出て行った後、今日日曜日だから学校も休みで確かソウちゃんも部活なかったと思うから、ソウちゃんと一緒にどこか出かけよう。。。

それによく考えたら今ソウちゃんと鎖月を一緒にしたら鎖月が口を滑らせて私がソウちゃんの事好きな事をばらしてしまうかもしれない・・・やばい。

私は急いで部屋を出て。

「鎖月。。。ちょっとこっち来なさい」

私は鎖月を廊下に連れてきて。

「鎖月、ソウちゃんに私の気持ちばらしてないわよね……」

「ええ、もちろん」

「そうならいいのよ」

そう言って私はソウちゃんのもとまで行っ

「ねえソウちゃん、今日私と一緒に出かけない？」

「ん？ いいけど」

やったわくくもしかしてこれってデートって言うんじゃないかしら？ そうよこれはデートだわ、こうなったら一秒でも時間が惜しいわね。

「ソウちゃん一秒でも時間が惜しいわ早く行きましょう」

チャラチャラ〜ン

私の携帯が鳴り出した。

ん？ だれかしらこんな大事な時にメールしてくる人は今は一秒でも惜しいのに。

メールの相手は貴地先輩からだったメールにはこう書いてあった。

大事な話がある、東公園にきてくれ。

多分告白だろう、もちろん今からソウちゃんとデートだから行かない。

私はメールの返信でこう書いた。

すみません今から大事な用があるのでいけません。

返信してから私は携帯の電源を切った。

「姉さん用事が出来たの？なら出かけるの止めるよ」

「大丈夫、大丈夫それより早く出かけましょう〜♪」

ソウちゃんと一緒に出かけるのと比べたら告白されるのなんてチリに等しいわ。

「そっか、まあいいけどさ、で？何処行くの？」

う〜んやっぱりデートといったら映画よね〜。

「映画館行きましょう〜♪」

「分かった」

その後映画館に着いた私たちは、恋愛話の映画を見る事になった。

~~~~~映画が始まって一時間後~~~~~

私今理性がぶつとびそうです、なぜかって？だってソウちゃんが私の肩に頭置いてぐっすり寝ちゃってるからじゃないですか。

「スースースー」

やばい本当に理性が飛びそう・・・どうしょ私昨日キスも出来なかったし~~~~ん今ならキスしちゃっても大丈夫じゃないかしら・・・そうよ大丈夫よ。

私の頭の中で天使と悪魔のバトルが始まった~~~~。

天使「だめですよ、そういうのは相手の許可が無くては」

悪魔「いいじゃんかキスしちゃえ~~~~だいたい今までだって許可無くキスしちゃったんだから~~~~」

そ、そうよねいに決まってるわ。

天使「待ちなさい今まではうまくばれずにキスしたかも知れませんが今この場所は映画館ですよもしかしたら人に見られて変な噂がたっちゃうかもしれません」

悪魔「大丈夫だよ、だいたい恋人同士になりたいんだろならそういう噂がたっちゃた方がいいじゃんか」

た、確かに。

天使「待ちなさい、そうになったらソウちゃんが苦しむかもしれませんよ？それでもいいんですか？」

それはだめだ、悪魔よ消えろ～～。

悪魔「く、くそ今日は勝ちを譲ってやる～～」

悪魔VS天使の勝負天使の勝ちよって私はキスするのを我慢します。

えらいえらいぞ私、その後一緒に買い物したりして、すごく楽しかったで～～～す。

無事デートも終わって、鎖月の家からお泊りセットを返してもらって今私とソウちゃんは自宅に帰ろうとしています。

「やっぱ俺怒られるよな～～」

「大丈夫よほら手つないであげるから」

「ああ、姉さんありがとう」

ソウちゃんが私に向けてにつこり笑った。

やばい、かなりカッコイイそれに私今ソウちゃんと手つないでる～～キャ～～～嬉しい。

その後家に帰るとやっぱりソウちゃんと私は結構怒られた……。

でもソウちゃんと手つなげたからいいもん～～～～。

第六話 布団？

どうも皆さん、俺の名前は鹿嶋相馬です、今俺はかなり～～困ってます。

今日は早く起きたから布団から出ようとする姉さんが下着姿で俺に抱きついてねているからです！！！！

まあ、今までは俺の布団にいつの間にか入って寝てるときはありましたよ……。でもちゃんと服は着てました、なのに今日は下着ですよし・た・ぎ……。どうしよう、起こすべきですね。。。。。

「姉さん起きろ～～」

揺さぶってみると。

「ん、ああ、ソウちゃんおはよう」

「なあ、姉さん一つ聞きたいことあるんだけどいいかな？」

「うんうんいいよ何でも聞いていいよ何が知りたい？私のスリーサイズ？」

「そうじゃなくてなんで俺の布団でしかもし、下着姿でねてるんだよ」

多分俺顔真っ赤だと思う、てか姉さんスタイルよすぎなんだよ、胸はでかいし。。。。。

「いやゝゝアハハハ・・・なんというかそのゝゝ」

（ソウちゃんに女として意識してもらうためなんていえないわゝゝゝでも今ソウちゃん顔真っ赤これって作戦成功よね、そうに決まってるわウフフフ）

かなり姉さんがあせってた・・・うんだれから見ても分かるほどに・・・何かにやけてるし・・・。

「まったくまあいいや今度からやめろよ、その姉さんだってその・・・女の人なんだから・・・」

「分かったわゝゝゝ♪」

（今の言葉で確信がつかめたわゝゝゝ作戦は大成功だわゝゝゝフフ絶対またしよう）

「はあゝゝまあいいや着替えるから出てっしてくれない？」

「いいわよゝゝ私の事さあ着替えて、私もソウちゃんの生着替え見たいから♪」

うわゝゝブラコンだと思ってたけどここまで行くと何か？神レベルと思えるよ・・・。

「いいから、ほら出た出た」

姉さん無事部屋から追い出して、制服に着替えて部屋からでると、いつの間にか制服に着替えた姉さんが覗こうとしてました・・・てか覗いてたんじゃないのか？

「…………姉さん覗いてた？」

すると姉さんは残念そうな顔をして。

「あともう少し着替えが早く終わってたら覗けてたんだけど…………ハしまった…………嘘よ嘘覗こうとなんてしてないわ…………」

はあく姉さんは嘘つくのかなり下手だな…………（芽衣が嘘をつくのが下手なのは相馬限定です）
てか泣きそうだし…………。

「分かった、分かったから泣くなってな、ほら俺全然怒ってないからな」

俺がそう言って頭を撫でると姉さんは目を細めてかなり喜んでた尻尾でも着いてたらかなり早く振ってただろう。

「ほんと？嫌ってない？」

「うん、ほんとだから嫌ってないから」

何か改めて見ると俺と他人の接し方が全然違うな…………。

俺の場合はよく甘えて来るけど他の人の場合はクールというかなんと言うかまあ全然違うな…………。

「ありがとう♪」

（よかった嫌われなくて）

う、その笑顔は反則だよ…………。

「ほ、ほら早く朝ごはんくいに行くぞ」

俺は早歩きでリビングに向かった・・・どうしようあまり親に会いたくねえ・・・いつものことだけど昨日家出から帰ってきたばかりだし親父にはこつてりと怒られたから・・・どうか親父はまだ寝てください。

てか何で姉さんはあんなに元気なんだよ、はあく姉さんの頭の中はどんなことを考えてるんだか（ほとんど相馬の事を考えてます）

「お、おはよう」

俺がぎこちない笑顔で入ると、最悪な事にすでに親父はいました・・・はい最悪な事に。

「ああ、相馬おはよう」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

空気が重いです・・・本当に姉さんも話そうとしないし親父と母さんも話そうとしない。

まあいいけどさ・・・。

その後も誰も話さないで時間が過ぎて登校時間になった。

「お、俺そろそろ学校に行かなくちゃいけないからいくから、姉さんも行こう」

俺が言うと姉さんは笑顔になって。

「うん♪行こう」

学校に向かって鎖月と姉さんと適当な話をしている間に学校に着いた。

続く・・・・・・・・。。。

第六話 布団？（後書き）

すみません、何か中途半端で、次回はこの続きを書こうと思います。

あと今年もよろしくお願いします。

第七話 助けて!!

(この話は第六話の続きを芽衣視点で書いたものです)

ウフフフフ、今日ソウちゃんの布団で下着姿で寝てたのは効果あったわね、ウフフフフ。

「芽衣、どうしたの?何かものすごーくにやけてるよ、弟君といいことあったの?」

今話しかけてきたのは佐藤奈美だった。(二話に少しだけでてます)

「ウフフよく分かったわね、さすが私の親友」

「はあゝまあいいわあと昨日なんで電話したのに電源切ってるのよ」

あゝ確かに昨日はソウちゃんとデートだったから邪魔が入らないように電源切っちゃったんだっけ、フフフデートの事思い出すとまたにやけが止まらないわ。

「えへへへ、つい」

「ついつて、噂で聞いたんだけど昨日は弟君と一緒に出かけたいね」

「え、何で知ってるのよ?」

「だって芽衣って目立つから普通に見かけたら噂になるわよ」

そうなんだ〜今度から気をつけないと、あそうだ携帯の電源つけないと。

電源をつけると新着メールが十件と電話が十三件来ていたしかもほとんどが貴地先輩・・・ちよっとひくよ・・・ほんとに、はあ〜。

「どうしたの？」

「何か貴地先輩から結構メールと電話きてたんだよね・・・多分告白だと思う・・・」

「嘘、貴地先輩って野球部のエースで顔も結構美形だから人気あるのよ！！すごいじゃない！！」

奈美が驚いたような顔をした、でも多分私の表情はどうでもいいって感じの表情だろう。

理由は簡単ソウちゃん以外の人に告白されたって全然嬉しくないから。

「ふ〜んそうなんだ」

「はあ〜どうせまた断るんでしょ？」

「当然、一応メールに今日の放課後体育館裏に来てってメールが来てたから行くつもり」

でも本当は全然行きたくないよ〜はあ〜今日はソウちゃんがバス

ケ部あるから見学しに行こうと思ったのに・・・。

その後奈美と適当に話しをして、授業が始まったから席についた。

~~~~昼休み~~~~

フッフ今日はソウちゃんと一緒にお弁当が食べれるわ、なんせ私には協力者がいるもの、ふふふふ。(その協力者とは鎖月のことである)

なるほど鎖月からのメールによると屋上にいるのね。

私が屋上のドアを開けるとそこのは驚いたような顔をしたソウちゃん  
やんと普通の顔をした鎖月がいた。

今の驚いたような顔をしたソウちゃんもたまらなくいい。

「な、なんで姉さんがここにいるんだよ」

かなりあせってるわね~~~~、私はそんなソウちゃんを抱きしめて。

「ソウちゃんのこととで私に分からない事は無いのだよ」

はあ~~~~実際にはソウちゃんの気持ちは分からないけどね・・・。

「は、早く離れろよ、ほら弁当くいにきたんだろ早く食べようぜ」

私は名残惜しかったけどソウちゃんから離れてソウちゃんと一緒に弁当を食べはじめた。

「ほら、アーン」

「いいよ、自分で食べれるから」

「恥ずかしがらないでほら、アーン」

私が粘って言うところウちゃんは諦めたのか。

「わかったよ、ほら」

そう言って口をあけた、そんなやり取りを数回していると昼休みの終わりのチャイムが鳴った。

「じゃあ姉さん俺授業あるからいくな、ほら鎖月行くぞ」

そう言って屋上から出ようとするソウちゃんに。

「あ、ちょっとだけ鎖月の事借りるからソウちゃんは先言っておく」

「ああ、わかった」

ソウちゃんが出て行った屋上で私は鎖月に。

「鎖月今日のソウちゃんの様子どうだった？」

「えっと〜普通でしたよ、あ、でも何かいきなり「もし布団で寝るときに下着姿の女の人が入ってきたらどうする？」って聞いていました、ってかまさか芽衣さんがやったんですか？」

フッフ確実にソウちゃんは意識し始めてるといったほうがいいわね。

「ええ、そうよ」

すると、鎖月は驚いた顔をして。

「はあゝそうだったんですか、で他に質問ありますか？」

「もいいわ教室に戻って」

鎖月はそのまま教室にかえって私も自分の教室に帰った。

~~~~~放課後~~~~~

私は貴地先輩に言われたとうり体育館裏に来ていた、けどまだ貴地先輩はきてないみたい・・・女の子を待たせるなんて・・・はあゝ早くしないとソウちゃんがバスケしている姿を見る時間が減っちゃうじゃない。

すると、走って貴地先輩が来た、何かその顔の表情は少し怒っているみたい・・・・・・・・・・何かしたかしら私？

「なあ、鹿嶋昨日は大事なようがあったから、公園にこれなかったんだよね？」

「ええ、そうですけど、どうかしましたか??」

「じゃあ何で昨日は相馬と一緒に買い物してたんだ？」

この人は何言っているんだろう？ソウちゃんと一緒にデートするのが大事な事なんですけど……。

「何でって、ソウちゃんと一緒に買い物言ったりするのが大事なようだからですけど」

「それは、俺の大事な話より大事なのか？」

「そうですけど、何か？」

すると顔がみるみる怒りの表情に変わっていき。

「ふざけるなよ！！！！なんだよこの俺が大事なようがあるってメルしたんだぞ普通弟と遊んでないで来るだろ！！！！」

なにこの人もしかしてナルシストだったの、うわゝゝ性格悪いわねえゝゝ。

するといきなり私の肩を掴みだした。

「い、痛ちよつと話してくれませんか」

「ふざけんなよ！！」

そう言って私の胸を触ろうとしてきた、私はある程度武術は出来るけど今は怖くてあまり足が動かなかった……。

（助けてソウちゃん！！！！）

私が心の中でソウちゃんに助けを求めると、よく知った声が聞こえてきた。

「つたく、騒がしいと思ったら何してんだよ」

そうそこにいたのは私が大好きなソウちゃん。

私は貴地先輩に一瞬の隙が出来たからすぐに貴地先輩から離れてソウちゃんの後ろに隠れた。

ソウちゃんは少しおびえている私を見て、そっと頭を撫でて。

「姉さんもお大丈夫だから」

そう言って笑顔を向ける、ソウちゃんはいつも私がピンチの時に現れてくれて頭を撫でて笑顔で励ましてくれる、それが私がソウちゃんが好きな一つ目の理由だ。

私はそのソウちゃんの笑顔を見たときすごく心臓がドキドキし始めた、胸が苦しくなるほど。

「で、あんた姉さんに何してんだよ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7773f/>

ブラコンの姉貴と俺の憂鬱

2010年10月12日06時57分発行